

---

# クローバー

新川四葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローバー

### 【Nコード】

N4489P

### 【作者名】

新川四葉

### 【あらすじ】

主人公、桜川優紀（女）が男として葉山学園に入学してから、1年が過ぎた。

無口、真面目、先生からの信頼も厚い生徒会副会長の優紀に2年の春転機が訪れる。

始業式。優紀のクラスに転入生がやってきた。彼女の名前は上木楓。美少女なのに普通の女の子とは何か違う…本当の楓の姿とは！？

優紀の運命は、楓との出会いで大きく変わり始めた…

## ・プロローグ・

私立葉山学園（はやまがくえん）に入学してもう1年が過ぎた。

中学でのあの忌まわしい過去も忘れるくらい俺は充実した生活を送っていた。ただ一つを除いては…

「ふう〜。これで入学式の準備も終わりが…」

俺は生徒会副会長をやっている。生徒会長ほど目立たず、ほとんどの仕事が生徒会長のサポートと雑用。

生徒会長とは仲がいいし、それにあまり人の来ない生徒会室が好きだった。

コンコン！

「はい！！」

「よっ！副会長おつかれさん」

生徒会室に入ってきたのは俺の兄貴でこの高校の教師の桜川慎哉（さくらかわしんや）である。

ちなみに生徒会の顧問でもある。

「なんの用だよ。」

「冷たいなあ…。せっかく妹の優紀（ゆうき）の頑張りを見に来たっていうのに…。」

「…!!」

幸い今日は春休みで生徒会役員も俺を除いては誰も来ていない。

「はあゝ。もう、お兄ちゃん！学校でこの話はダメっていったじゃん！」

「はは！！ごめんごめん。たまには学校でも女の子扱いしてやりたくなってな。」

実は…私、桜川優紀（さくらかわ ゆうき）は女であるにも関わらず男としてこの学校にいる。

このことを知っているのは兄の慎哉とお父さんのお兄さんにあたるこの学校の理事長だけである。

あたしは、中学時代クラスのリーダー格の女子が好きだった男子と仲がいいという理由だけで女子からいじめられ殺されかけた。

明るかった性格も変わり女子恐怖症になってしまった。

そんなあたしを近くで守れなかったといってお兄ちゃんは自分のいる高校に男として入学しないかと誘ってくれた。

理事長も事情を説明したらあっさりOKしてくれて今あたしはここにいる。

「1年はうまく過ごしたみたいだな。成績は優秀だし、生徒会副会長としても先生の評判もいいぞ！」

クラスでは、ほとんど本を読んで女子とは関わりがないし周りからも副会長は真面目すぎでつまらないっていわれるくらいだし…

目立ちたくないあたしにとってはこれくらいでいいんだけどね。

でも、生徒会長で同じクラスの智（とも）とは話も合うし仲がいい。

それに、女としてここに入れてたら付き合いたいくらかっこいい！！

たぶん、あたしは智の事が好き…

「…き、おい！」

「えっ！？なに？」

「俺の話聞いてたか？」

「…ごめん。聞いてなかった。」

「…つたく。始業式の日、お前のクラスに転入生が来るから。先生たちの推薦でお前にしばらく面倒を見てもらいたいらしいんだが…」

「ん」。いいけどなんか問題あるの？」

「それが、女の子なんだよ。女の子なら女子に面倒見させればいいんだろうけど…この学校広いいろいろ教えるには生徒会長より副会長のお前につて！真面目さで言ったらお前の方が先生の評判いいからな！…でも！女子と関わりなくなったら断ってもいいんだぞ。

「

中学でのが頭をよぎった。

でも、あれから結構たつたし今は近くにお兄ちゃんもいるしあたしはこの話を受けることにした。

「そろそろ乗り越えなきゃいけない頃だと思ってたし、あたしやるよ！お兄ちゃん。でも、辛くなったら相談乗ってね！」

「当たり前だろ！かわいい妹のためだ。それじゃあ、おまえの担任に伝えておくから。それから、今日の晩ご飯カレーでよろしく！」

「もう。本当の目的はそつちなんじゃん！！」

まったくお兄ちゃんのカレー好きにはあきれる。

さつさとあたしは残りの仕事を片付けてカレーの材料を買って帰宅した。

この会話を聞かれてるとも知らずに。

「ふうん。面白いこと聞いちゃった。これから楽しくなりそう。」

## ・プロローグ・（後書き）

今回、初めて執筆したので読みにくいところなどもあると思いますが、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。  
よかったら感想お願いします。

- 出会い -

始業式。

この学校はクラス替えや担任が変わることがないからみんな見慣れたメンバーだ。

だから今年も智も一緒だし。

「おはよ！智」

「ん？おはよー優紀」

「早速、寝坊かよ！今日始業式なのに」

「仕方ないじゃん、春休み遅寝遅起きだったんだもん。体が慣れなくて…ふあ」

こんなたわいのない話をしてる瞬間が1番の幸せだった。チャイムが鳴り、担任が教室に入ってきた。

「おはよう！みんな今年もよろしくな！今日は転校生を紹介するぞ。入れ上木」

そう言われて入ってきた転校生をみた瞬間…クラス中が大騒ぎになった。

「まちかよ！！チヨーかわいいんだけど！！！！」



「キヤー！キレイ」

教室に入ってきたその子は今までに出会ってきたどんな女の子たちよりもキレイで可愛かった。

女であるはずのあたしでさえしばらく目が離せなかった。

「おまえら静かにしろ！上木がビックリするだろ。ごめんな上木うるさいやつらで」

「あーせんせ。ひどいなあ」

「ほら、上木に自己紹介してもらってから静かにしろ！！ほら上木自己紹介」

そついわれて黒板に名前を書いて

「上木楓（かみきかえで）です。諸事情でこちらに転校してきました。あ、あたし見かけによらず結構サバサバしてるんで気軽に話しかけてください！よろしく。」

その言葉通り見た目に反してちょっと男の子っぽさもあるような気もした。

少し違和感があったが、その時はそんなに気になることはなかった。

「そーだ、副会長！」

「はい！」

「話は聞いてると思うが、しばらくの間上木の面倒見てやってくれない！学校案内とか」

「わかりました」

「じゃあ席も副会長の隣な」

その時クラスの男子が

「副会長いいなー！せんせオレじゃだめなのー？」

「お前らにこんなかわいい子の面倒なんて任せられるか！それに他の先生たちも副会長を推薦したんだよ！」

クラスに笑いが起きた…そしてみんな「副会長が適任に決まってるじゃん！」と口をそろえた。

「ちえっ仕方ないっか。副会長なら真面目だし譲るか！あっ！副会長抜け駆けはダメだからね！」

「えっ！そんなこと…。」

あたしはビックリした。

クラスでこんな話をする日が来るなんて思ってもいなかったから…

こんなことを考えてたら、隣に上木さんがきた。やっぱりカワイイ…

「えっと…副会長？よろしく！」

といって握手をされた。

「あつ。うん。よろしく」

「いきなりなんだけど、今日の放課後さっそく学校案内してもらえるかな？早く慣れたいからさ！時間空いてる？」

「大丈夫だよ！でも、生徒会室にちよつと顔出さないといけなから少し待ってもらっけど大丈夫？」

「大丈夫！！じゃ教室で待ってるから」

授業が終わり休み時間になると上木さんの周りには人の群れができた。

噂を聞きつけた他のクラスの子たちも見に来ていた。

それに上木さんは言ってた通りサバサバした性格ですぐに友達も出て来ているようだった…

「俺が面倒見なくてもいいんじゃない？」と小さな声で言った瞬間、智の声がした！

「なあ優紀。上木さんすげえな」

「…！！」

「優紀も上木さんみたいなのがタイプだったりすんの？」

ビックリした…

「ん〜。確かにかわいいとは思っけど今は女の子に興味はないかな。お前は？」

「俺はめっちゃタイプ！」

「えっ！？」

「なんでそんなに驚くんだよ。俺だってそろそろ恋したいじゃん？」

まさか…智がそんなこと言うなんて思わなかった。あたしは必死に動揺を隠すように言った。

「じゃなくて、この前の子彼女じゃないの？」

「あああの子！違うよ。落ち込んでたから慰めてただけ！」

智が彼女を作らないことは知っていたから慰めてただけってのも本当は知っていた…

智は、みんなから慕われてるし実行力あるしかっこいい。

男女がまわらず優しいから、女の子も智に近づいてくる。

だから、付き合っていると勘違いされることが多々あるけど、女の子と付き合うことに関してはすごくしっかりしてる。

でも、さっきの智の言葉が気になる…上木さんと付き合ったら美男

美女のカップルだな。とか思い上木さんにちよつと嫉妬してしまつ…「まただ…」女の子に戻りたいって思ってしまう自分がいる。

智といるとたまにこんな感情が湧き出てくる。

でも、あたしはこの学校卒業するまではこの気持ちは封印するって決めたから……

まっ、それに男としてここにいる以上恋は出来ないだろうけど…

- 本性 -

放課後、生徒会室に顔を出して教室に戻ってきた。

下校時間を少し過ぎたから校内に残る生徒もまばらで教室には上木さんしかいなかった。

「お待たせ。遅くならないうちに帰らせたいしもっ行こ！」

「うん」

広い校内を1周しながら案内をした。

教室ではあんなに元気だった上木さんはあたしと一緒にだと口数も少ない…

やっぱり真面目そうに見えるから話にくいのかな…とか思ってたらいきなり

「あのさあ、副会長なんで男のふりしてんの？」

一瞬耳を疑った。それを知ってんのはお兄ちゃんと理事長だけ！

「何言ってるの上木さん！俺どう見ても男に決まってるじゃん」

と動揺を隠しつつ普通に返した。なのに…

「実は…春休み生徒会室の前で副会長と先生が話してるの聞いたやつた！あれ副会長だよな？」

あの話を聞かれてた！！

「ち、違う！！」

「嘘つかなくていいよ。俺1度見た人の顔忘れないから」

てことは完全バレてんじゃん…でも確証はない。

「確認なんだけど…どこから聞いてたの？」

「ん」。全部！先生が中入ってくの見てたし」

だって、だって…あの時周りには誰もいなかったしお兄ちゃんだって何も言っていなかった。

あたしの頭の中は混乱していた。

1年間誰にもばれずにやってきたのに、しかも転校生に知られるなんて…

しかも、こんなことばれたらもうここにはいられない。

実家に帰ったらあいつらがいる学校に戻らなきゃいけなくなる……

「頼む。それだけは黙っていてくれないかな！！」

あたしはすぐる思いで上木さんに頼んだ。なのに、返って来た返事は信じられないものだった

「じゃあさ、交換条件ね。黙ってる代わりに、副会長。俺と付き合わない？俺、男なんだよね」

「……………！！！」

あたしは言葉を失った。いま…なんて言った？おこと…？つきあう…？

「いま…なんて…？」

「何って。俺、男だし。副会長、女じゃん！！だから付き合ってよ！俺、副会長に興味もっちゃった」

あまりの驚きにあたしは男のフリをしてることもここが学校であることも忘れて叫んでしまった。

「はあ？あんた何いつてるか分かってんの！？てか、大体今日会ったばっかのあんたと付き合えるわけないじゃん！！大体なんで男なのに女の格好してんのよ！」

「あれ？副会長こんなキャラなんだ。」

上木は楽しそうな笑みを浮かべてこっちを見てる。

こいつ絶対あたしで遊んでる。こんなやつなんかと付き合うなんて絶対あり得ない。

「第一あんたも女装してるんだしばれたら退学だよ！」

「別にばれても前の学校戻るし。ばれたくないのは副会長でしょ？」



ああ、完全に弱みを握られた…。

「でも、あたしはあんたとは付き合わない」

「じゃ、副会長が俺にキスしてくれたらあきらめるし、ばらさない」

「…!!」

信じられない!!キスだってまだしたことないのに…しかもこんなやつに

「しないのー?じゃ付き合うつてことでいいんだね?」

悩んだ末…あたしはバレて実家に帰ることよりキスを選んだ…乱暴なキス。初めてだったのに…

一瞬、智の顔がよぎり涙が出そうになった。

「これでいいでしょ!!もうあたしに関わらないで!!」

あたしはその場から逃げるように去った……

- 楓 -

時は少しさかのぼり。春休み。

俺は上木楓。性別は男。

前の学校がつまなくて高校2年から近所の姉ちゃんが先生してる  
葉山学園に無理やり転入させてもらった。

しかも、『女』として。だってその方がおもしろそうじゃん！

今日は転入手続きで学校を訪れた、広い校内で職員室を探していて  
迷った俺はとりあえずうろうろしながら職員室を探していた。

その時、生徒会室に先生らしき人が入って行ったのを見た俺は職員  
室の場所を聞こうとした。

生徒会室の中には先生と少し華奢な男子生徒がいた。

話が終わってから声をかけようと思って入口近くで待つことにした。  
すると中から気になる言葉が聞こえてきた…

「なんの用だよ。」

「冷たいなあ…。せっかく妹の優紀の頑張りを見に来たっていうの  
に…。」

んっ？

今、妹って言葉聞こえなかったか？

俺の頭に疑問が湧いた。

さっき見たとき生徒会室には先生と男子生徒しかいなかった…

この疑問を知りたくなった俺は中の2人の会話を盗み聞きしてしまった。

……

やっぱり、この男子生徒は『女』で、しかも、面白いことに転入生の俺の面倒を見てくれるらしい。

「ふ〜ん。面白いこと聞いたかった。これから楽しくなりそう。」

先生が出てくる前にその場から少し離れた。

そして生徒会室から出てきた先生にいかにも今来たかのように声をかけた。

「先生ですか？」

「そうだが、キミは？」

「あたし、今度転入することになった上木楓です。転入手続きで来たんですけど迷っちゃって職員室まで案内してもらえますか？」

「ああ！話は聞いてるよ。こっちだ」

俺は職員室まで案内してもらった。始業式が楽しみだ。

- 始業式。

あいさつもそこそこに俺は春休みのあの話の張本人の横にいる。

なんかいかにも副会長って感じの真面目。今日は眼鏡もかけてるし余計そう見える。

放課後、校内案内を頼んだからいじめてやろうと思う。楽しみだ。

休み時間はクラスのやつらが俺のまわりに集まってくる。

昔から、顔もいいし人気だったけど女としてもいけるんだな。とか思っていた。

ふと、副会長の方に目をやると、なんか難しそうな本を読んでいる。友達少なそうな雰囲気だな。とか思いながら放課後まで過ごした。

- 放課後。副会長が俺のところに来た。

「今から生徒会室行ってくるから少し待ってて。10分くらいで戻る。」

そう言い残して行った副会長の横には、副会長の性格とは正反対な

男がいた。

話に聞くとこの学校の生徒会長らしい。

俺は2人を見ていたその時、生徒会長と話していた副会長の笑顔を  
見た。

「……／／／」

なんだ、あの反則的な笑顔！？

男だっと思ってたら気付かないけど、実はめちゃくちゃかわいいじ  
ゃん／／／

俺は副会長が戻ってくるまでその顔が忘れられなかった。

……

「お待たせ。遅くならないうちに帰らせたいしもっ行く！」

「うん」

さっきの笑顔をまた思い出してしまい。俺は話が出来なかった。

副会長も今は真面目な感じに戻ってるし……てか、そもそもこの子は  
なんで男装してるのか？

俺の頭の中は副会長のことではいっぱいになっていた。

そして俺の口は思ってたことを口にしてしまった…

「副会長なんで男のふりしてんの？」

副会長はかなり驚いてる。

しかも、ばらされないようにすっごい必死だし。

俺は副会長の反応が楽しくて自分が男であることもばらしてしまった。

しかも、「付き合って！」まで。これには自分でもあとから驚いたんだけどさ。その時、

「はあ？あんた何いつてるか分かってんの？てか、大体今日会ったばっかのあんたと付き合えるわけないじゃん！！大体あんたもなんで男なのに女の格好してんのよ！」

俺は驚いた。

こんな真面目な副会長演じてるからもつと静かな子かと思ってたら結構言っじゃん！

でも、俺としてはこっちの方がよかった。いかにも女ってのはめんどくさいし…。思わず笑みがこぼれてしまった。

あっ！いいこと思いついた。

キスしなきゃ付き合っつてことにすれば嫌でも付き合ってくれろっつて。

我ながらいいアイデア！

「じゃ、あんたが俺にキスしてくれたらあきらめるし、ばらさない」

「…っ！」

付き合っつて言葉が出てくると思った瞬間。

俺の唇に何かがあたった。やわらかい？

俺は理解するのに少し時間がかかった。まさか…キス…！

予想外の展開に俺は困惑した…しかも去ってったその子の目には涙？が見えた気がした。

あきらめるって言ったのに俺はあきらめられない気がした。

「副会長…いや、優紀。おもしろいやっぱ俺の女にしたい。」

- 休日 -

今日は土曜日。

昨日あんなことがあったから正直学校あったら休んだ。

ばらさないって約束で、キ…ス…しちゃったけど保障はないしね。

月曜学校行きたくないな…

「…優紀？具合悪いのか？」

お兄ちゃんが心配して部屋まで来てくれた。

でも、さすがにお兄ちゃんにも昨日の事は話せない。

「うっん。大丈夫。」

「俺、今日も学校で仕事あるから行くけど、なんかあったらすぐ連絡しろよ！」

「うん。今日、気分転換に出かけてくるね。」

「わかった。気をつけろよ！」

お兄ちゃんは学校に行ってしまった。

こういう気分が沈んでる日は、久々に女の子の格好して買い物行くこ  
う！



そう思ったら、気持ちが少し軽くなった。

「よし！メイクして買い物行くぞ！！」

我ながらこういう切り替えは得意だな。

中学の時はできなかったのに……こっちきてお兄ちゃんや智に会って  
からかな。

「よし、バッチリ！鍵も閉めたし。行ってきます。」

……

「ふう。いっぱい買い物して楽しかった。晩ご飯の買い物して帰ろ  
うかな」

今日は、シーフードカレー。

また、お兄ちゃんのリクエスト。

2週間に1回はカレーなんだもん。ちょっとあきちゃうな。とか、  
考えながらスーパーを回つてると……

「ちょっと！楓！聞いてる？」

「えっ……！？」

今、一番聞きたくなかった名前が聞こえた……

楓！？

たしか、あいつの名前も楓。

おそろおそろ声の方を向くと、格好は男だけどあの顔は忘れたくても忘れないあいつだ！！

しかも、一緒にいるのはうちの高校の日向先生…

「晩ご飯何がいいか聞いてんの！！」

「別に何でもいいし…てかなんで俺こなきやいけねーの？」

「荷物持ちに決まってんじゃん！か弱いレディーに重いもの持たせる気！？」

「どこがか弱いんだよ！！」

えっ！？？どういう関係？

あたしの頭は混乱していた。

そして、男としてのあいつの姿にうかつにも見とれてしまった。

だって、学校一かつこいい智に負けない。いや、むしろそれ以上…

その時！

「あれ！？日向先生じゃないですか？」

声をかけたのはお兄ちゃんだった！！

そういえば、さっきお兄ちゃんからメール来てスーパーで買い物してるって返したんだった…

「こんばんは。桜川先生。珍しいですねここで会っの。」

「ああ、晩ご飯の買い物だね。たまに来るんですよ。そちらは日向先生の彼氏ですか？」

ちょっとお兄ちゃん何聞いてんの？てか、上木だって気付かないの？

まああいつが女だって信じてればわかんないか。

にしてもズバツと聞きすぎ…

「違いますよ。歳離れてるけど一応、幼馴染ですね。彼氏にするなら、桜川先生みたいな大人な方がいいですわ。」

「えっ／＼／」

お兄ちゃんお世辞なのに真に受けてるし…

でも、たしかに日向先生は年下相手にする感じでもないし、幼馴染でこの学校に通うために一緒に住んでるとしたら納得できる。

なんて考えてたら、上木と一瞬目があつた気がした…

「ヤバツ！」

あたしはその場から急いで去り買い物を済ませ、お兄ちゃんに連絡してすぐに帰った。

〈楓サイド〉

ん？誰だ？

日向と桜川先生を見てるってことはうちの学校だろうな。

でも、クラスにはあんなかわいい子いないし、てかいたら俺が見逃すわけない…

ふと一瞬その子と目が合った。

その瞬間その子は逃げるように去って行った…なんでだ？

でも、なんか気になる…

「…っ！まさか…！」

そっぴいあいつ桜川先生の妹だし。

先生がここに来たのも偶然じゃないとしたらやっぱり！

俺はすぐに追いかけて探した…でも、見つからなかった…

「まちかよ。あんなにカワイイなんて…／＼／」

俺は帰ってから優紀の姿が忘れられなかった。

日向から、優紀、いや…副会長の話を聞いた。

でも、やっぱり真面目で頭がよく先生の評判がいくらかいしか聞けなかった。

こんなに女に興味を持ったのは初めてだった…

- 急接近 -

「はあ。」

月曜日になってしまった…

土曜日に楓の男の姿を見てから楓のことばかり考えている。

ううん。ダメだ！あいつは危険すぎる。

それに、あたしは智の事が好き…！

あたしは、好きって気持ちで封印することはやめた。

付き合えなくても気持ちだけは…じゃないと…

てかちょっと待って！

智は楓のこと気になってたんじゃ…

ううう。なんか複雑すぎる。

とりあえず「楓はダメ、近づかないで」って智にはそれとなく言う  
うなんて考えてたら

「優紀、俺先に学校行くぞ！あんまりぐずぐずしていると遅刻するぞ  
！」

「うん！あたしももう少ししたら行く！行ってらっしゃい！」

「いつてきまゝす」

学校にも兄妹だってことは隠してるからいつも学校に行く時はバラバラ。

ご飯を食べ終わり、あたしは男子制服に着替え、学校用の眼鏡をかけた。

髪は少し長めだから顔は隠れるし女だってばれる事はまずない。

「よし、じゃ俺も行くか」

あえて、俺、という言葉を口にしてあたしは学校に向かった。

学校に着くと、あたしの男装のことはばれてない様子だった。

ひとまず安心。

でも、気になることが1つあった。

智がすでに学校に来ている…でも席にいない。

にしても、智がこんなに早く来るなんて珍しい。

あたしは自分の席に向かった。

あたしの席に誰かが座ってる…えっ？智！？しかも、智が話しているのは楓！

「なんで…」

智があたしに気付いた

「おっ！優紀おはよー！」

「ああ、おはよ。おまえなんで俺の席にいんだよ…」

「楓ちゃんと話したくって、今どくよ」

「ああ、そう。」

楓もあたしに気付いた。

「あっ！優紀君おはよー」

はっ！？

今、優紀君って…

この学校で優紀って呼ぶのは智とお兄ちゃんくらい。

あとはみんな「副会長」って呼ぶ。

しかも、この前まで楓も「副会長」って呼んでたじゃん。

一体、何たくらんでんの？

あたしは聞こえなかったフリをしてそのまま席に座り、本を読み始



めた。

「優紀君、なんか怒ってるのかな？」

楓は智に聞いていた

「優紀があいさつされて返事しないことはないから、たぶん聞こえなかったんだよ」

智は楓にそういい。楓と楽しそうに話を続けた。

楓と仲良くする智にちよつと苛立ちつつ…

でも、やっぱり、女装姿の楓は男とは思えないくらい美人だ。とか思ってしまう。

智が惹かれるくらいだし、あたしは智には釣り合わないな。なんて思ってた…

授業が始まって、しばらくたつと楓から小さく折られた紙を渡された。

相手にするつもりはないが一応開いてみた。中に書かれてたのは…

「土曜、スーパーにいたでしょ？」

「…っ！！」

あたしは思わず声を出しそうになってしまった。

やっぱり見られた…てか化粧もしてたし女の格好してたから絶対に誰にもばれないと思ってたのに。

よりによつて、またこいつに…

あたしは、その手紙をすぐに丸めて机の隅において休み時間に捨てた。

もう、楓には関わらないって決めたんだから！！

幸いにも、休み時間や昼休みは楓のまわりに人だかりが出来るからあたしが楓と関わることはなかった。

- 放課後、あたしは智と生徒会に行く準備をしていた。その時

「優紀君！少し時間いいかな？」

楓が、声をかけてきた。

「あつ。ごめん、今から生徒会な…」と言い終わる前に智が、

「ええ、楓ちゃん。俺にじゃないの？」

と智が言った。

「智、おまえは生徒会行かなきゃ！！上木さん悪いんだけど俺も生徒会あるし今日はごめん」

って言って逃げようとしたら

「楓ちゃん急用そうだし、優紀話し聞いてやれよ。生徒会は先やってるから！」

ああ、智…。こういうときの智の優しさが辛いな。

智にこう言われたら断れなくなる

「わかった。じゃ、智、先に進めててくれ」

あたしはそう言って楓の話を聞くことにした。まじ、気が重い。あの手紙の事かな…

誰もいない教室に戻りあたしは口を開いた…

「…で、何？」男口調で聞いた

「優紀。さっきの手紙みたっしょ？」

やっぱり、そうだった。「違う！」って言おうと思ったとき、ん？  
優紀？

「楓！なんで呼び捨てなの？てか、名前で呼ばないでよ」

「えゝなんでえ。智君は名前で呼んでんじゃん」

「智は特別！…！」

「じゃあ、俺も特別にして。てか優紀も、俺の事名前で呼んでんだ  
しいいじゃん」

「…!!」

うかつにも、楓のこと名前で、しかも呼び捨てにしてしまった…

あの事件以来「上木さん」なんて長いから「楓」って頭の中で思っ  
てたことがつい出てしまった…

「コホンッ！上木さん…話ってそれだけ？俺は土曜ずっと家にいた  
よ。じゃあ俺は生徒会に行くよ」

「ちょっ、待ってって！話まだ終わってない！」

その瞬間、あたしの腕は楓につかまれ、楓に引き寄せられていた。

楓が近い…／／あたしの体は固まり、動けなくなっていた。

「な、なにすんの!？」

楓はあたしの眼鏡を取った

「あの時のやつは優紀じゃん…。おれがあんなカワイイ子間違える  
はずがない…」

「…／／／」

今、なんて言った？

カワイイ？

あたしが？

顔がさらに熱くなるのがわかり、頭が真っ白になった。

あたしは、楓から眼鏡を奪い、突き放して生徒会室にかけていった。  
ドンツ。鈍い音がした。

「…いった…。でも、近くで見るとまぢかわいい…。」

後ろですごい音が聞こえた。

でも、そんなのかまわずあたしは走って去った。

生徒会室に入る前に着いてもまだ動揺していた。少し気持ちを落ち着かせ何もなかった様に入って行った…

「遅くなってごめん。」

生徒会役員はまだ集まってなく、いたのは智だけだった。

「あれ？優紀、早いね。もう話いいの」

「ああ、どうでもいい話だった」

「ふん。ねえ、優紀。俺まぢで楓ちゃん好きになるかも」

「まあ、頑張れば…」

心にないことを言ってしまった。

さっきの楓の「かわいい」って言葉が頭から離れなくて智の言葉が入ってこなかったからだ。

生徒会が終わり、門を出て反対方向の智と別れて帰宅した。

少し歩くと学校のすぐ近くに公園からブランコをこぐ音がする…

この時間は、夕飯時だし子供もいない。

珍しいなと思ってそっちに目をやると、うちの高校の制服をきた女子がいた。

まあ、高校生なら別に心配ないかと思って歩き出した…

「…っつきー！優紀ー！！」

「えっ！？」

あたしが後ろを振り向くと楓がいた。

「なんであんたがいんの！？てか、帰ったんじゃない？」

暗くてよかった。

楓だと思った瞬間、さっきの出来ごとが頭をよぎり顔が熱くなったのが分ったから…

「あー。さつきはいきなりごめん。謝りたくて優紀待ってた。あのスーパーで見たから家こっちだと思って…」

春だといつてもまだ肌寒い。

それに、あれから3時間以上は経ってる。

しかも、あたしが歩きだなんて知らないはずなのに…

楓にはもう、関わらないって決めてたのに…あたしの気持ちはおかしくなっていた…

「…いいよ。てか、あたしこそ突き飛ばしてごめん。けがしてない？」

「えっ！？ああ大丈夫…」

楓は驚いた顔をしていた。

あたしだって、驚いてるよ。

自分がこんな奴の事心配してるなんて…

でも、こっちにきてお兄ちゃん以外に女の子扱いされたのは楓が初めてで、しかも謝るだけの為に何時間も待ってるなんて思いもしなかったし、気が動転してたんだと思う…

「あのさ、俺、優紀と付き合いたいって言ったの本気だから…もう1度考えてみてくれない？だから、今週の日曜俺とデートしてほし

い！！」

あたしは、声が出なかった。

本気…？でも、今の楓からは本気だっていうのが伝わってくる…

「…わかった。じゃあ日曜10時にココでいい？」

自分でもなぜこんなことを言ってしまったのかわからなかった。

でも、ちょっと楓の事を知りたかったんだと思う…

「…えっ！？まだで！？やった！！…優紀、女の格好で来いよな！」

「…！！！」

あたしは、小さくうなずくとその場から走って家に向かった。

その次の日から、木曜日までは何事もなかった。

月曜の出来事が嘘じゃないかと思われるぐらいに…

楓は、すぐに友達が出来ていつの間にかあたしが頼まれた面倒係も必要なくなっていた。

智は相変わらず、楓にべったりで話をしている。

あたしは楓が男であることを知っているからなのか、それとも楓に惹かれているのかわからないが、智と楓が一緒にいることがそんな



に気にならなくなった…

金曜日の放課後、あたしは生徒会室に向かっていた。

その時、前に楓がいるのが見えた…

あれ以来言葉も交わすこともなかったあたしはなぜか緊張してしま  
い下を向いてしまった。

気付かないふりして通り過ぎようと思ったのに…

「日曜、忘れんなよ…」

楓は小さな声でそう言い残していった。あたしは、また顔が熱くな  
るを感じた。

なぜか日曜日が待ち遠しくてたまらなくなった…

く楓サイドく

月曜。公園から帰って家のベッドに寝転がった…

「早く日曜にならないかな…」

俺は帰るなりもう日曜が待てなくてしょうがなかった。

まさか、優紀がデートOKしてくれるなんて思わなかったから。

それに、また、女の姿の優紀が見れるのが嬉しくてたまらなかった…  
次の日から優紀と話して「やっぱ、なしにしよう」とか言われるのが怖くて俺は金曜まで優紀に話かけられなかった。

それに友達もできたから、俺の面倒係も頼みにくくなってたし…休み時間は俺の周りには誰かしらいた。

特に最近はずがよく話しかけてくる。

たぶん、俺に好意を抱いてることはわかってるけど、さすがに男に興味はねえーから適当に相手していた

けど、優紀の唯一の話相手だった智を奪ったような気がして申し訳ない気がしていた。

「最近あいつ笑わないな…」

俺は優紀の事しか考えなくなっていた。

授業聞く姿、本を読む姿はをみるとやっぱりかわいいなあと思ってしまう。

たぶん、女の格好をしてたら男どもが寄ってきそうだなとか、優紀が男装しててよかったとか考えていた。

金曜の放課後、職員室から教室に戻る途中、優紀が前から歩いてきた。

明らかに俺の顔を見て下を向いた。そんな姿もかわいくてしょうがない…

「日曜、忘れんなよ…」

俺は日曜優紀が来ることを願いながらそう言っていた。

・初デート・

「…眠れなかった…」

時計をみると6時。まだ約束の時間まで4時間もある。

でも、あたしの胸はドキドキが止まらなかった。

早く起きてもお兄ちゃんが不思議がると思い、とりあえず部屋で今日の服を選ぶことにした。

「…楓、どんなのが好きかな？」

無意識に言っていたことに後から気付き恥ずかしくなる…//

気付くと1時間が過ぎていた。

「うそっ…！」

あたしはリビングに向かった。お兄ちゃんが朝ごはんの支度をしてくれた。

「おはよう。お兄ちゃん」

「おはよう優紀。そだ、お前今日なんか予定あるか？ないならお兄ちゃんと出かけない？」

こうやってお兄ちゃんはいつも気遣ってくれる。でも、今日は…

「ごめん。今日は約束があつて！晩ご飯までには帰ってくるから」

「そっか。わかった。じゃ俺は1日部屋でのんびりしてよっかな」

あたしは、ご飯を食べ部屋に戻った。

シャワーを浴び、いつもより女の子に見えるように髪もセットしメイクをした。

服は先週買ったばかりの新品。

「よしっ！！」

時計を見ると9時半を過ぎてる。急がなきゃ！！

「お兄ちゃん。行ってきましたーす！」

「ああ。行つてらっしゃい。…ん？優紀、なんで女の格好してんだ？約束なら学校の奴だろ？」

お兄ちゃんの言葉なんて聞こえてなかった…

「はあ。はあ。…」

着いた。

時計を見たら5分前。間に合った…まだ、楓は来てないみたいだ。よかった…

時計が10時をまわった。

「あれ？おかしいな…。約束は10時だったよね？」そんなことを考えながらも少し待っていた。

「アド、聞いておけばよかったな…」

その時…

「優紀！…ごめん。遅れた！…」

「ほんと、遅いよ！…」

そう言って声がした後ろを振り向くといつもとは違う、本当の楓がいた。

カッコいい…／／／

でも、口にしない。そんなこと言ったら、楓が調子にのっちゃう…

沈黙が続いた…先に沈黙を破ったのは楓だった。

「…優紀。本当の事言っていい？」

「な、なに？」

「…かわいすぎ！！俺以外には見せるなよっ…！！って俺何言っただ…」

えっ！？

あたしの聞き間違いだと思つくらい嬉しい言葉…また顔が熱くなる。  
なんで楓はこんなに素直に言えるんだろう。あたしも、勇気を出した…

「楓もカッコいいよ…／＼／」

今日のあたしはおかしい…この前まで、あんな関係だったのに…楓の言葉に、行動に、あたしはどんどん惹かれている。

「そつえば、どこ行く？」

この空気を断ち切るようにあたしは聞いた

「あつ。俺行きたいところがあるんだ。いい？」

「いいよ。どこなの？」

「着いてからのお楽しみ。楽しみにしててよ!!」

あたしたちは、駅に向かい電車に乗り、すこし町から離れたところに来ていた。

「こんなところに何かあるの？」

楓に聞いてみた。

「もうちょっと待って。あと少し」

「…うん。」

楓が立ち止まる。

「優紀。ちょっと、目閉じてて」

あたしは言われた通り目を閉じた。

「今日の優紀、素直だね。じゃ、ちょっと歩くよ」

また、顔が熱くなった。楓に手を引っ張られ少し歩く…

「いいよ。あけて…」

あたしはゆっくりと目をあけた

「うわぁー!!」

そこにはクローバーがいつぱいの草原が広がっていた。

誰にも言っていないがあたしはクローバーが大好きだった

「ここなら、誰にも見つからないし。本当の優紀でいられるでしょ？」

「…えっ!？」

信じられない言葉だった。



あたしを気遣ってここにしてくれたことにあたしは胸がいっぱいになり。

泣いてしまった。

「どうしたの？優紀？こんなところじゃイヤだった!？」

楓は突然泣き出したあたしに驚いてるようだった。

「……うん。…うれしくて、楓ありがとう…」

その時、あたしは楓に引き寄せられ気付いたら腕の中にいた。今日はイヤじゃない…

「優紀がどうして男装してるかなんて俺からは聞かないから。でも、辛くなったら俺がまたここに連れてきてあげる…」

「…うん。」

あたしはしばらく楓の腕の中で泣いていた。

どれくらい時間が過ぎただろうか…泣き疲れたあたしは楓の腕の中で眠ってしまった。

たぶん、昨日眠れなかったせいもあるんだろうけど…

「優紀？起きたの？」

上から優しい声がした。

「ごめんね。寝てみたい…」

あたしは恥ずかしくなって楓から離れた。

「いいよ。優紀の寝顔見れてラッキーだったし」

そこには意地悪な楓がいた。でも、この前までの嫌な感じはしない…

「ねえ。楓…」

「…ん？」

「あたし楓と付き合ってもいいよ…」

「…うん。…！？えっ！？優紀、今、なんて！！」

「…楓、あたしと付き合ってください。でも、学校では今まで通り、男のあたしと。女の楓ね。他の女の子たちに本当の楓知られたくないし…」

自分でも大胆なことを言ってるのはわかっていた。でも、今は素直な気持ちと言いたかった…

「本当に！？俺でいいの？俺まぢで嬉しいんだけど…」

「うん。」

こうして、あたしたちは付き合うことになった。

その後、携帯の番号を交換した。

「ねえ。楓、なんでここにしたの？まわりに人がいないところなら他にもあつたんじゃ」

「ああ、実は…恥ずかしいんだけど俺、クローバーが好きなんだよね／＼日向に聞いて、ここにしようって思って」

意外な共通点だった。あたしたちはクローバーに引き寄せられてたのかな？

「実はあたしもだよ。ビックリだね！」

「うそ！？まちかよっ！すっげえー偶然。運命だよ！」

こんな恥ずかしいことを言えるくらい楓は本当に嬉しそうにしていた。

そして、あたしたちは帰る時間までいっぱい話をした。

あたしが男装している理由。楓が女装してる理由をお互いに話し合った。

まっ、楓の理由にはあきれたけどね（笑）

楓は、あたしの話を真剣に聞いてくれた。あたしの辛さをわかってくれた。おかげで、少し強くなれた気がした。

帰りの電車の中で、楓がいきなり言ってきた。

「にしても意外だったなー」

「なにが？」

「だって、学校で副会長の時の優紀は、無口だし。女子はともかく、男子ともつるまないじゃん」

「こんなに話すやつだとは思わなかった。まっ、俺はこっちの優紀が好きだけどね！」

また…／＼好きと言つ言葉に慣れていないあたしはすぐに恥ずかしくなる。

それに「好き」って素直に言える楓が羨ましいな…

「だって、もしもばれたとき誰も傷つけないじゃん」

「実は、優しいのな優紀って…」

「失礼な。あたしはいつも優しいよ。」

「あはは。やっぱり優紀いいわ。」

そんな話をしてる時、ふと思い出したことがあった…

「あーっ！」

「な、何！？うるさいよ優紀」

「ごめん。じゃなくて、楓、始業式の日放課後のアレ…あたしのファーストキスだったんだからね。こういう結果になったからいいけど…／／／」

「うそっ！ごめんな。あれは本当にすると思わなくて…」

楓は本当に申し訳なさそうにしていた。

チュッ！

「…ッ／／え、優紀？」

「もういいの、これがあたしのファーストキスってことにするから恥ずかしかったけど、これでチャラにしてあげるよ。」

こんな話をあたしたちはずっとしていた…

駅に着いて、家の前まで送ってもらった

「早かったな…。」

楓の言葉通り今日はいろいろあったし、好きな人と一緒に入れたから時間はあっという間に過ぎた。

「そうだね。また、明日から副会長と上木さんだね」

「そうだな。まだ、信じられないよ。優紀と付き合えるなんて…」

「あたしもだよ。でも、学校では話せなくてももうメールできるし」

ね」

帰るのは辛かったけど。昨日までのあたしじゃないからなんでも出来る気がした。

「じゃあ、また明日ね…」

「ああ。帰ったらメールする。また明日…」

寂しいのをこらえて家に入った…

こうして、あたしの長い一日が終わった…

〈楓サイド〉

帰り道、今日の出来事を思い出した。

「なんか、いろいろあったなあ…」

まさか、付き合うことになるまで思わなかったし…それに今日はいろんな優紀を見た…

思い出すだけで、顔がにやける。

早く帰って優紀にメールしよ！俺は、走って家まで帰った。

・初デート・（後書き）

優紀と楓の『出会い〜付き合う』までのお話でした。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

これから2人については「クローバー・2」で現在連載中です。  
よかったらご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4489p/>

---

クローバー

2010年12月20日21時11分発行